

## 亜人の結託

県立鹿児島南高等学校 二年

福島新矢

東京郊外のある場所では、5、6人程度の人達が何かを探すように周りを見渡しながら、うろついている。その中でもひとときわ身体の大きい人物が周りの者達に向かって、命令口調で話している。

「おい、まだ見つからないのか。ささいな事でもいいから、何もないのか」

その周りに特に捜し物について手がかりがない事を悟ると、その男は舌打ちをした。その一方、黒いフードを被った人物は、安どしていた。

「フウ……何とかまけたみたいだなあ」

そんなことをつぶやきながら、これからどう逃げたらいいかを考えてしまい、少し憂鬱になった。このような逃亡生活をするのも、気が付けば、3年の歳月が経ってしまっていた。しかし、あの時はこのようになるとは思っていなかった。

それは遡る事3年前のこと……。

俺、藤原真は、大学生4年生で就職間近だった。しかし、そんな大事な時期にある事件が起きた。旅行に行っていた両

親と中学生の妹が帰ってくる途中に、玉つき事故に巻き込まれてしまい、帰らぬ人となってしまったのである。その事故の原因は車の運転手の飲酒運転だった。その事を聞いた俺は、強烈な怒りが、腹の底から黒いなかか、こみあげてくるような感覚に襲われた。そんなどうしようもない怒りを発散する為に酒を飲み、いつの間にか熟睡していた。

目を覚ますと、酒を飲みすぎたせい、ひどい頭痛と吐き気に襲われた。だから、水を飲み、身支度をした。しかし、大学へ行く途中、誰にも声がかかけられない上に、目があうことすらなかった。なぜか分からなかったし、声がかからないにしても、道を歩いていたら、少なくとも1回以上は、目が合うはずなのに、そのような事がないということが起きた。とにかく気にせず大学での授業を受けようと思った。しかし、そこからまるで自分の存在が認知されていないと感じる程、友人と話すこともなく、何がなんだか分からず、とぼとぼと歩きながら、帰路についた。そのとき、近くでガサガサという音が聞こえた。振り返ってみれば、誰もいる気配がしなかった。ので、気のせいだと思ったのだが、目の前には屈強な男が立っていた。

「藤原真、亜人へと変異したお前をこの場で処理する。何か死ぬ前に言いたい事はるか」

その男は俺に銃口を向けながら、そんな事を言った。言われた事も意味が分からず、このままでは死んでしまうと思い、来た方向とは反対の向きに無我夢中で走った。後ろから、男

とその部下らしき人物との会話があったが、生きるために走っていた俺には聞こえることはなかった。それからというもの、どこにきつきのような男達がいるのかと、不安に駆られながら、逃げ続けている。

その逃亡生活の中で、亜人やその軍人についても、分かったことがある。亜人とは、ある特定の条件化する人間の変異体であり、異能を必ず一つは持っているということ。そして、あの男達は、その亜人を処理する為に、向けられた者であると言うことも分かった。それに、俺の手掛かりを見つけていないことで、全国に指名手配してまでも、処理をするという手段が使われている為、異能を使わないと迂闊に動けない状況になっている。その上で、俺の異能は隠密で、一定時間姿を消す能力だが、気配は完全に消すことはできない。この能力を使い、追っ手を上手く撒いている。しかし、俺の居場所を特定する方法も、軍人の特定方法も知らないところも多い。だが、このまま死ぬまで逃げきれるか分からないし、いつ見つかる、捕まるか分からないから、精神がゴリゴリ削られている気分だ。せめて、亜人に会えれば少しは状況が改善されるかもしれないが、今のところ会ってはいない。俺が撒いた連中が、又近くに近づいてきて、何か話し合っているではないか。俺はその連中に能力を使って近づき、耳を澄ました。

「おい、黒フードの男以外に亜人がこの近くにいるとは本当なのか」

「ああ、あの方は数日前に変異したらしい」

「しかし、黒フードの亜人はどうするんだ？」

「黒フードの亜人は3年探しても、処分どころか捕まえることすらできていないから、痺れを切らしたんだろう。それに、もう片方の方が楽に処理できるからな。分かっただらとっと行くぞ！」

そう言うと、連中はもう片方の亜人を探しに向かった。ここは助けるべきだろうか、連中からの意識は向かなくなるが、そこまで長くはない。しかし、仲間が増えるにしても、足手まといになったら、どうすべきか？ いや、その時は切り捨てればいい。とりあえず、共に行動できる亜人が増えれば、多少は状況が好転するかもしれない。そう思った俺は、もう片方の亜人を助ける為に、動いた。しばらくは、連中の動向をうかがい、隙を見て亜人の方へ近づいた。すると、頭の中に誰かの声が響いてきた。

「誰でもいいから助けて、助けて、助けて」

それは女性が助けを求める声だった。すると、連中が、

「こっちだ！」

と叫びながら、向かってくる。だから、俺は逃げている亜人の方へと先回りをして、後ろから口を塞いだ。彼女はモゴモゴと何か言っているが、緊急事態なので、近くの廃ビルの中に入り、彼女の口を塞いでいた手を離し、解放した。

「あなた誰ですか！ それにいきなりこんな所に連れてきて非常識すぎる！」

彼女は怒りをあらわにしながら、俺に向かって言った。そこで、俺は自分の自己紹介をし、自分の知っている追っ手や巫人について、今の状況について簡潔に説明をした。

「なるほど、どういう状況に置かれているのかは分かりました。しかし、助けてくれた事について文句を言ったことは謝罪します」

「ああ、問題ない。助けるにも、少々手段が強引だった。それと、俺と仲間になってほしい」

「まあ、助けていただいたので、それは構いませんが、この廃ビルに追っ手とかは来ないんですか？」

「万一来たとしたら、俺の異能を使えばいい」

「分かりました。それと私の異能は思考誘動です。相手の思考を私を助けるように誘動したりできます。それに真さんが追っ手と違うと思ったので、さっき能力を使いました」

「だが、思考誘動というよりは意志を頭に直接伝えるようなものではないのか？」

「いえ、あの時はかなり動揺していたので、そう思われるのも仕方ありませんが、嘘は言っていないので、事実です」

「なるほど、分かった」

「そうして、彼女との会話は終わった。」

「それと、私は内宮綾といいます。これから、よろしくお願ひいたします。真さん」

「ああ、こちらこそよろしく」

「そう言って、綾と俺は握手した。」

「それと、今日はこの廃ビルからは移動せず、明日から別の場所に移動する」

「それは構いませんが、追っ手を待ったのなら、どこかで住宅を借りることはできないのですか？」

「無理だ。巫人は、なぜか全員顔が特定されているし、少し経ったら、綾も指名手配されるから、見つからないように、逃げ続けていた方がいい。それと見張りは交代で」

「了解です」

「久々の人との会話に心が少し楽になった気がした。しかし、それもつかの間、耳を澄ませば誰かが上がってくる音がする。」

綾の事を見捨てて、能力を使って逃亡するか、このままやり通すか。いや、綾の能力と合わせて撃退しよう、数人ならまだしも、一人ならたやすいはずだ。そう考えた俺はそのことを綾に話し、上がってくる者を撃退する準備をした。綾が思考誘動で俺以外の者に注意を向けさせ、俺は能力で姿を消し、近くに落ちている瓦礫で上がってきた者を撃退しようとしたが、避けられてしまった。すると、そいつは、俺の前で笑みを浮かべながら、こう言った。

「会いたかったよ。我が同胞。君達を迎えに来た」

「俺は一瞬そいつが何を言っているのか、分からなかった。」

しかし、そいつは追っ手と同じ服装で、そう言ったからこそ、俺の頭はより一層混乱した。すると、そいつはこちらに近づいてきた。

「そう警戒しなくていい。軍人のなりをしているが、俺も君

達と同じ亜人だ。それに迎えに来たと言っただろう」

もし、目の前の人物が亜人で俺と綾を助けてくれるのなら、これ程いい話はない。しかし、嘘の可能性もあるが、追っ手なら一人で乗り込まないし、俺達に時間の準備など与えずに、殺せるはずだから。だから、俺は能力を解いて、返事をした。

「ああ、分かった。ついていく」

「えっ、本当に大丈夫なの？」

「もし、敵だったら、もう死んでるだろ」

「真さんが言うなら、分かりました」

「話が早くて、助かるよ。強硬手段に移る前に判断してくれて、嬉しい限りだ」

そう言っ、俺達3人は移動をした。

そして、今は一軒家の二階建ての家の前に立っている状態だ。

「さあ、入ってくれ。中で君達と僕達と話しをしよう」

そう言っ、入ると居間には5人の男女が椅子に座っていた。

「さあ、座ってくれ。まずは、自己紹介をしよう。左側から竹、健人、美久、留璃、咲、そして僕は正人だ。それと彼らの能力だけ僕は洗脳、竹は偽装、健人は探索、美久は千里眼、留璃は睡眠香、咲は伝達だ」

自己紹介と能力を俺達もした。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「まあ、そう硬くならないで、リラックスしよう」

「それじゃあ、本題に移ろうか。君達には僕達と協力して、特務隊を潰して貰う」

「その特務隊というものを潰す為に俺達を助けたのならば、まず説明をしてください」

「ああ、そういえば説明をしていなかったね。特務隊というのは、僕達、亜人を処分しようとしている連中のことだよ。

そして、特務隊を潰すというよりはつくり変えるのが、僕達の目的であり、君達に協力してもらうことだ」

「そうですか。説明してくれてありがとうございます」

「ああ、話が早くて助かるよ。それと今日は遅いから、親睦を深めるためにも、食事にしよう」

そうやって、俺達と6人が食事をしながら、これまでの事やこれからの事について話し合った。

「ところで、正人さん、どういう計画なんですか」

「ああ、それはね。竹が僕に偽装し、特務隊の連中の行動を連絡する。真君はその連中の注意を引きつけておいてくれ。竹からの連絡は咲が伝達をする。留璃と僕は特務隊の本拠地向かう。それと、綾と健人は真君とは別で、特務隊の連中を引きつける。そして、決戦の日は、2週間後だ。それでは、おやすみ」

正人さんに今日、計画の内容を一通り聞いたが、上手いくとは思えなかった。特務隊がどういうものなのかはよく知

らないが、無謀なのではないかと思った。そして、俺はかくまおうとしてくれている事やこれから亜人が処分されずに、今までみたいな逃亡生活がなくなるのであればいいが、失敗すれば終わりだ。これは一種の賭けみたいなものだ。どの道、失敗したとしても前の生活みたいに精神をすり減らしながらの逃亡生活に戻るだけだ。やるしかないと決意し、眠りについて。

2週間後、俺達、亜人の戦いが始まった。計画通りに俺は特務隊の奴らにわざと見つかるようなヘマをし、能力を使って撒くという事をかれこれ1時間繰り返し続けた。俺は特務隊の意識を少しでも俺に向けさせること。それに、数が増えたが、どの方向から援軍が来るのかは健人さんと咲さんの能力で遂に分かる。綾の場合は俺みたいに逃げ回るのではなく、特務隊の奴らが俺に注意が向くようにしたり、わざと見つかるようなヘマをしたりしても、それを怪しまないように思考誘動してもらっている。それに、特務隊の中に混じっているの、見つかる心配はないだろう。そして、奴らの注意を引きながら、逃げ回ること数時間、咲さんから衝撃的な事を知らされた。その内容は正人さんと留璃さんが本拠地の制圧に成功したという内容だった。すると、俺を追いかけ回していた特務隊の奴らは引き始めた。成功したとしても、状況整理の為に、一旦戻ることにした。そこで、咲さん、健人さん、綾、俺は集まり、咲さんからの報告を聞いた。

「まず、相手の本拠地で、留璃の睡眠香を建物の中に充満さ

せて、そこにいる亜人の所長を洗脳したのが正人。それで、亜人の処理というのを亜人を実験のために収容するというような内容の命令に変更したのよ」

「てか、それだったら正人さんと美久さん以外いなくても良かったのでは？ それに所長が亜人というのも驚きなんですか！」

「まあ、確かに。まあ、その所長は亜人という存在が自分以外に認められなかった自分至上主義みたい。能力は千里眼みたいだったから、私達のことを把握できたんだと思う」

「そうでしたか。なんか最後はやけにあっさりと終わりましたが、この2週間、ありがとうございました」

本当に、こんなあっさり終わって逆に怖いくらいだ。それに前までの生活が終わるなら、正人さんと美久さんのコンビはチート過ぎる。まあ、自分がもう追われないので、気持ちが入ると軽くなった気がした。これまでの逃亡生活に費やした時間の分、気のままに暮らそうと思えば、その場を離れた。